最高の恩師

中国文学科三十期卒業　杉山　功

「杉山君」、「はい」と私は返事をしました。「君、今、前の人の代返をしたんじゃないかな。声がそっくりだ。」とその独特な低い声で言われました。すかさず、私は席を立ち、「代返はしていません。」と答えました。先生は「あ、そうか。」と言われると私の顔を確認してから次の学生の出欠をとり始めました。それが野口先生と私がはじめて言葉を交した時でした。新緑の香りが立ちはじめた五月、昭和五十四年のことです。高坂駅から学バスで十数分。静岡から出てきた私でもこんな山の上に大学があるとは思いませんでした。その東松山校舎の四号棟にある書道教室で授業を受けたことが先生との出会いとなりました。当時先生は四十代。私も二十歳でした。週一度、火曜日の授業であったと記憶しておりますが、何よりも楽しみな時間でした。「温泉銘」、「十七帖」、「牛橛造像記」など古典の臨書を教えていただきました。先生は教壇で添削されるだけでなく、学生の机を回り指導されました。私もふと気がつくと先生がすぐうしろにいらして、「ここはこの様に」と筆を持ってもらい、その後、余白の所に「之」の字を書いていただきました。そのことがとてもうれしかったことを覚えています。それ以来、その朴訥としたお人柄とたしかな書風に大きな魅力を感じ、入門させていただいた次第です。

大東文化大学では松井如流先生の主宰されておりました「松書会」に変わり、新たに野口先生の社中が計画されていた時期でした。

翌、昭和五十五年、野口先生を顧問に迎え、二十人程の会員が集い「硯桜会」は発足しました。私も幹事長として参加しましたが、当時の大東には書道部や大きな社中がいくつかあり、その船出は期待と共に不安の多いものでした。しかしながら、先生のご熱心な指導のもと、爾来、二十回を数える展覧会を開くまでの会となり、多くの卒業生を送り出すことになりました。先生ご自身も助教授から教授、そして毎日展や日展でのご活躍は周知の通りです。

先生がこの三月で退官されることになりました。寂しいことですが、昨年の毎日書道展での「文部科学大臣賞」受賞、そして個展「野口白汀の字」開催と見事に大輪の花を咲き続けられています。私は先生の重厚な作風が好きで、隷意のある大字作品が最も先生らしいと思っています。円熟した技術に加え五感に響く書は見る者へ感動を与えてくれます。そしてその書業への評価

は、昭和・平成・その次の時代へと移り変わっても不変なものであると信じています。

今、私はこの二十数年を感慨深く思い出すことができ、先生に感謝を申し上げます。